

銭湯の

怪死事件



野蒜二郎（のびるじろう）少年は警察から一目置かれた探偵であり、筋金入りの変態でもあった。昼間の彼は警察に依頼された難事件の捜査にあたる英雄だが、夜はもっぱら女装趣味に格別のこだわりを光らせる。単に女モノの衣装を着て町を練り歩くだけでは飽きたらず、行為はエスカレートしていき、しまいには女風呂へ侵入するために近所の銭湯に通い、股間を隠しつつ入浴と周りの女性観察を楽しんでいたのである。彼は豊満な胸こそなかったが、ボディーラインの華奢さと持ち前の長い髪で、たとえ裸であっても女性を思わせる何かを持ち合わせていたのだ。浴槽は白湯の露天風呂以外真っ黒な冷鉱泉を用いた温泉銭湯だということもあり、今まで気づかれたことは一度もなく、彼は女子風呂の中で得意げだった。

この日も彼は初音湯に向かい、男の大事なところだけは嚴重に隠しながら、秘密の時間を楽しんでいた。自分を女と偽れること自体も変態としての彼の欲求を満たしたが、女性の裸をいくらでも見られるのは格別だった。とは言え、この日は彼の好む若い女性は来ておらず、女風呂にいたのは老人ばかりであった。

「お嬢ちゃん」

浴槽に浸かっていると隣の老婆に声を欠けられた。

「何でしょう」

声を上擦らせながら答える。さすがの変態探偵でも少しばかり緊張する。

「若いのに銭湯だなんて関心ネエ。この辺りの学生はこんな場所なんて興味持たないだろうに」
確かに、彼の長い女風呂入湯歴上、銭湯で若い女性を目の当たりにする機会のごく希であった。返答に困った野蒜少年はありがとうございますと適当に濁してその場をしのいだ。

「お前さんは違うけど、最近の若い子のは分かんないネエ」

どうやらこの老婆は野蒜少年のことを完全に女だと認識しているようで、野蒜少年はほっと胸をなでおろした。老婆の世間話は精神文化の変遷から過去の回顧録へと発展していく。老人の話題とはえてしてそういうものである。

「昔はこの辺りもナア、洋風のお洒落な洋館が立ち並んで、それはそれはハイカラな町並みだったのにヨウ、今となってはどこもかしこも団地だのマンションしかないんだア。一軒家は全部なくなり、当時の名残があるのはこの銭湯くらいなもんだ。ゆゆしきことよ」

そうですね、と適当に相づちを打つ。初音湯は内装こそ昔ながらの和風銭湯であるが、正面入口だけは洋風建築となった少し変わった施設となっている。屋根が高く、浴室内が広々としているのも人気の一つだった。確かに、ここだけは昔の時間が流れているのかもしれない。

真っ黒に染まった湯は野蒜少年が動くたびに溢れ、床を濡らし、タイルの隙間を茶色に染めていく。しばらくの間、小谷雪子と名乗るその女性と世間話に花を咲かせていた。お湯の温度が極端に下がっていると気づくまでは。

「なんだか変のう」

「どうしたんですか？」

あくまでも女らしく、丁重に尋ねる。

「この浴槽、普段は四二度に設定してあるはずなんだがナア」

野蒜少年もややぬるいなとは感じていた。温度計を見ると三八度であった。温度はなおも下がっていた。

何かがおかしい。

野蒜少年は浴槽の端にあるタヌキの置物を見た。本来であれば、地下から汲み上げられた冷鉱泉が銭湯の釜で熱せられ、熱い湯が絶えずタヌキの股間から流れ出ているはずだったが、今でているのは冷たい冷鉱泉そのものであった。中でボスッ、ボスッと厭な音ができる。

これはボイラーの故障であろう。お湯は体温以下になっている。

ひとまず二人は従業員に事情を説明すると、寒いのでサウナの中へ移動して浴槽が復帰するのを待った。サウナの中ではサスペンスドラマが流れていて、犯人が女装していたというだけの簡素なトリックだった。野蒜少年は番組ディレクターの軽率さに呆れながらも、自身の女装の完璧さを感じては悦に浸っていた。CMに移り変わると、植物を一瞬で成長させる謎の試薬について芸人がつなぎ姿で語っていた。

その時だった。

「きゃあああああああああああ」

悲鳴が轟く。瞬時に野蒜少年は探偵モードに切り替わった彼の第六感が殺人事件の発生を予言していたのである。

野蒜少年はすぐさまサウナから走り出し、声の聞こえた場所へと向かった。声をあげたのは初音湯の番台さんで、場所はきっとボイラー室であろう。

野蒜少年の予感は的中していた。火の消え去った初音湯の釜の中から男性の白骨死体が発見されたのである。第一発見者は初音湯の茂林寺邦子（54）。唯一、野蒜少年の予想外だったことは、名探偵である彼がいつものように警察の手助けをできず、裸のまま女湯から出てきたとして迷惑防止条例違反の容疑で逮捕され、警察に連行されていったということである。

「どうして逮捕するんだ！」

「当たり前だろうこの馬鹿者。ざまーみやがれ、ふはははは！」

「早くここから出して事件の捜査をさせろ！ 難事件が俺を呼んでいるんだ」

「そんなことより、どうしてお前は銭湯の女湯にいたんだ？」

「事件の捜査に決まっているじゃないか。俺を何だと思っている。天下の少年名探偵だぞ」

「どうして事件発生前から女湯に潜入できたのか小一時間問いつめたい」

「俺の第六感が可及的速やかに疼いたんだ。見事だろう」

「嘘つけや、いくらお前が有名人物だとしても、この神奈川県警・岩槻達哉は騙せないぞ」

「いい加減にしろこの無能刑事。俺に対しては強圧的に接する癖にいつもろくな推理ができず、結局いつも俺のことを頼ってお手柄を奪っていただけじゃねえか」

「それ以上減らず口を叩くな。お前の推理力は確かに優れている。しかし、今は女風呂に潜入していた変態野郎として逮捕されている状態だということをせいぜい肝に銘じやがれ。こんな師走の下旬に一体何やってんだ。その暗い部屋の中で自分の人生でも煩惱でも数えている」

「岩槻のおっさんよ、そんなんで今回の事件は解決できるのか？」

「当たり前だ。変態犯罪者のお世話になってたまるか」

「ボイラー室は当時密室だった。薪の保管場所から薪を運んでくる時以外、基本的に開かれることはない。したがって犯人は鍵を持っている番台の茂林寺邦子としか考えられないが、彼女はずっと番台に座っていたはず。となると、これは不可能犯罪だ」

「そんな馬鹿な」

「現実を見ろ。そこに事件がある」

「お前が女湯にいたのも立派な事件なんだがな」

「そんなことを事件と呼んだら本格推理小説ファンへの冒涇だろう。些細なことじゃないか」

「お前いっぺん死ねよ」

「警察の発言とは思えないっすねえ。それより事件はどうするんすか」

「よし、それならお前にチャンスを与えよう」

「そらきた」

「世間には安楽椅子探偵というジャンルが存在するな？」

「ああ」

「それなら、お前は今日から拘置所探偵だ。その中で事件の謎を解き、解決してやったらそこから出してやる。ただし、誤った推理を行っていたらもう一度ぶち込んで刑事告発する」

「望むところだ。資料はもらえるんだろうな」

「わからん。とりあえず考えろ。話はそれからだ」

「資料がなくちゃ推理できないじゃないか」

「そんなこと知ったこっちゃない。それじゃあ、せいぜいよく眠りな探偵さん」

「おい、ふざけるな。ちょ、電気消したらなにもできないだろう。俺が一体何をしたっていうんだ。普段から難事件を解決して世間の役に立っているじゃないか。こんな扱いはあんまりだ。」

おい、誰かいるかー？」

変態探偵は孤独であった。

こんな環境じゃあ女装することもできない。おとなしく事件について考えようと思うが、初音湯の構造なんて熟知していないからよくわからない。野蒜少年が覚えているのはせいぜい女湯内風呂の構造だろう。露天風呂は白湯で陰部が見えてしまうから入らないし、ボイラー室なんて立ち上がったことあるはずなかった。

周囲を見回した。拘置所の壁、一番上には申し訳程度に小窓が付いていて、月明かりが部屋に差し込んでくる。ルナティック。人間は生まれながらにして変態で、みんなそれを隠しているだけなのに、どうして露呈したものが裁かれなければいけないのかさっぱりわからなかった。食欲を隠すことはないだろうに性欲に関してはひた隠しにする。二つの欲求にどのような違いがあるのかさっぱりわからず、今日も拘置所のまずい飯を残してしまった。

拘置所の奥から突然物音がした。カチャリとドアノブの回る音。誰かが入ってきたらしい。この時間に見回りなどあるはずがなかった。何者かの侵入だろうか。野蒜少年は警戒した。

「二郎くん？」

聞きなれた声が響いた。外に立っていたのは黒髪をツインテールに結んだ少女だった。紺色のブレザーに赤と緑のマドラスチェックのスカート。胸にはオレンジのリボンを結び、頬を少し紅潮させていた。

「ああ、どうしたんだ綿子」

「お父さんに内緒で来ちゃった」

「どうやら高校の制服のままやってきたらしい。」

「どうやって入ったんだ」

「お父さんの私物から鍵をちょっと拝借して、ちょちょいっとね」

「さすが綿子だ。俺の彼女なだけはある」

岩槻綿子。名前のおりふんわりとした印象を与える小柄な少女。丸顔がややコンプレックスとのことだが野蒜はかなり気に入っている。どう考えても遺伝子の結びつきが感じられないが、岩槻刑事の娘である。ミステリー好きが高じて名探偵の野蒜にファンレターを送るようになり、いつしかつきあうことになっていた。野蒜少年の女装癖については理解を示しているらしい。

「ほら、ここに資料持ってきたから頑張ってるね」

「どうやって手に入れたんだ」

「これも、お父さんの私物から……」

実にいい奴だと野蒜少年は感激した。おまけに懐中電灯まで用意してくれている。野蒜が感謝の言葉を告げると、綿子はいよいよ真っ赤になった。

「早く帰ってきてね」

「ありがとう。感謝してもしきれないくらいだ」

「お父さんが言ってた。怪しい人はいるんだけど、犯行方法がわからないって」

「どういうこと？」

「お風呂に入っていた小谷雪子さんの旦那がここ最近失踪していたのに、捜索届けを出してい

なかったんだって」

「なんだって！」

「小谷さんは半分ボケていて捜索届けを出すのを忘れていたと主張しているみたいなんだけど、発見された白骨死体が旦那かもしれないということで警察は捜査をしているみたい」

「小谷雪子が保険金か個人的怨恨か何かのために旦那を殺害し、ボイラー室に投げ込んだということか」

「まだ司法解剖の結果が出ていないから白骨の特定はできていないけど、その可能性が高いとして捜査にあたっているみたいだよ」

「なるほど。貴重な情報をありがとう。頼りになるよ」

「まだボイラー室の密室については何もわかっていないけどね」

「この地図があればなんとかなる気がする」

「そうだ、もう一つ」

綿子は自分のカバンをごそごと探り、何かを取り出した。

「これ、あげる」

「何だこれは」

綿子から渡された大きめの袋を開けると、そこには紺色のブレザーとスカートが入っていた。

「これ、私の予備の制服なの。たぶんサイズ一緒だと思うから、自由に使っていいよ」

変態探偵はうれしさのあまり声も出なかった。

「そして、たまには私のこと思い出してくれるといいな……」

今すぐにでも彼女を抱きしめてあげたかったが、檻の中の探偵はどうすることもできなかった。月明かりが二人を照らしている。二人の愛は銭湯のボイラーよりも熱く燃え上がっていた。

岩槻綿子がまた来てくれる保証はなかった。事件の謎を解決しなければならない。

綿子の制服を身にまとい、すっかりご満悦した野蒜少年は懐中電灯で綿子からもらった資料を見回した。入口から入ると番台と休憩所があり、左側が男湯、右側が女湯。その奥は更衣室、内風呂、小さい露天風呂という構造になっている。ボイラー室は休憩所の反対側にあり、薪置き場は銭湯入口の反対、ちょうど露天風呂の裏側にあった。ボイラー室の鍵は各ロッカーの鍵とともに番台で集中管理しており、基本的に盗み出されることはない。合い鍵は一つだけ存在するが、これも番台にて管理していたという。

小谷雪子に関する情報。夫はすでに退職しており、年金生活を続けているが、働いたら負けだと開き直ったニートの孫を育てる為に金が必要で、あまり裕福な生活ではない。銭湯に通うのを日課としていた。夫との仲に関しては不明。いつの間にか恨みを連ねていた可能性もある。

白骨死体の正体は今のところ小谷雪子の夫、小谷平蔵であることを念頭に入れて捜査を続けているが、断定はできていない。むしろ、骨のすりへり・空洞化は進んでいるので高齢であることは確かだが、一般的な老人に比べると骨格が大きく体格の良い人物が推定されるので、果たして小谷平蔵のものであるのかどうか不明瞭であるというのが見解とのことだった。

すっかり女装した名探偵は天井を仰いだ。ため息をつく。我ながら女装は完璧であるが推理がうまくいっていない。どうにかしなければ、このまま変態として捕まってしまう。それだけは避けたかった。

綿子の制服に頼ずりしながら眠りについた。

あいつが来たので急いで資料と制服を隠す。

「国際的にすら名を馳せた名探偵がもう憔悴しきっているわ。フヒヒヒ愉快ユカイ」

「どうでもいいからその気味の悪い笑い声はやめろ。まともに捜査させろよ」

「女湯に入ってぬくぬくしている凶悪変態犯を簡単に世間へ出すことはできないんだよ、神奈川県警として」

「お前本当に警察なのかよ」

「それは今までの捜査を見ればわかるだろう。一応警察手帳も持っている。だからお前を逮捕したんだ」

「もっと逮捕すべき人がいるだろう、とっとと探せよ」

「いや、それはそれ、これはこれだ。それに、この神聖な決闘を忘れたのか」

「神聖もクソもねえよ。俺はただ自由になるためにお前の要求をのんだまでだ」

「フヒヒヒヒ。そうやって強がっていればいいさ、少年よ。そうだ、君にプレゼントを持ってきた。この部屋は端から見ても殺風景すぎるからね。ほら」

「何だよこの箱」

「見てわからんのか、11インチのテレビだよ」

「どういう罫だ」

「種も仕掛けもないことは保証する。せいぜい情報収集に役立てるがいい」

「ニュース報道なんて嘘っぱちばかりじゃねえか」

「いらないんだっいたらいいんだけどな」

「誰も不要とは言っていない。世論の矮小さに嫌気が差したんだ」

「そんな中2病でよく探偵が務まるな。変態なら務まる、いや、捕まるけど」

「この部屋寒い」

野蒜少年は漠然とテレビを見ていた。ニュース番組はとっくに終わり、いつものくだらないサスペンスドラマが流れている。俳優はいいのに、どうしてこうもトリックが杜撰なのだろうか。まだ新本格ミステリー作家の作品をそのまま映像化した方がいいんじゃないだろうか。麻耶雄高の「夏と冬の奏鳴曲」なんか見てみたい。きっと視聴者の大半は意味不明のまま終わるだろう。それでいいのだ。

ニュース番組では銭湯の怪死事件について少し言及した程度だった。事件の大まかな概要、そして死体が小谷平蔵である可能性について。司法解剖が進み、死体における骨格の大きさから小谷平蔵のものであるという可能性は少なくなってきたとのこと。警察では現在、他の候補者について詳しくあたっているという。

野蒜少年は一度事件を整理するため、頭をすっきりさせようと何も考えずにドラマを見ることにした。それは逆効果だった。探偵としての自分に焦りがでてきた。このままではいけない。早く、この拘置所から抜けだし、綿子に帰ってきたよと言わなければならない。そして今度こそちゃんとデートに連れて行ってあげよう。

いったんニュースが途切れ、いつものCMが流れてきた。すっかりなじみとなったこの怪しいCMだが、野蒜少年の思考は覚醒した。

むん、むん、むん。

脳細胞が活発に働き出す。変態としての彼から、探偵としての彼にメタモルフォーゼする。そしてすべてが繋がった。

「解決したって？」

「もちろん。野蒜二郎の遺書に不可能の文字はないんだ」

「今ちょっと噛んだだろう。格好悪う。まあいい、聞かせてくれ」

「犯人は小谷雪子で間違いない。女装した俺と会話することで簡単なアリバイを作っていたんだ」

「やっぱり女湯に忍び込んだんじゃねえか」

「話を逸らすな。それと、約束は守ってくれるんだろうな」

「もちろんさ。犯人が合っていればな」

「それじゃあ話を続ける。今回、一番問題となるのはどうやって小谷平蔵の白骨をボイラー室へ持ち込んだのか、という問題だ。ボイラー室は当時密室で、鍵は番台の茂林寺邦子が集中管理していた。どう考えても隙はない。しかし、答えは簡単なんだよ」

「全然簡単そうじゃないけどな」

「密室を破る必要なんて全くない。茂林寺邦子に薪としてボイラー室へ持ち込ませればいい」

「そんなこと可能なのか？」

「ああ」

「いくら54歳のおばちゃんでも薪と骨の区別くらいつくだろう」

「54歳をおばちゃんと言っては失礼だ」

「知らねえし」

「まあいい、茂林寺邦子はちゃんと薪を運んだ。確かに、白骨なら気が付く。しかし、白骨がどう見ても薪にしか見えなかったら、運ぶ可能性もあるだろ？」

「よくわからんな」

「最近開発された成長剤を使うんだ。ほら、CMでやっていだけろう。あの薬をかけると、植物が一晩のうちに一メートルは成長する」

「便利だな」

「確かに便利だ。小谷雪子は自分の旦那を殺害し、あらかじめ肉を削いで骨だけを残した。どんぐりを自宅の庭にでもどこかの山奥でもどこでもいいから埋め込み、その上に白骨をつるしておく。あとは芽が出たら例の成長剤をかければいい。植物は急成長を遂げ、瞬間に小谷平蔵の骨を幹の中にまきこんで、立派な大木として成長するだろう。骨格が本人よりも大きかったのは、成長剤が骨にしみこんでやや細胞が増殖したからに違いない。あれは紛れもなく小谷平蔵のものだ」

「なるほど。そりゃあすごいな」

「小谷雪子は銭湯の常連客だったから薪の消費ペースもすべて知り尽くしていた。どこに薪を入れればいつ消費されるかわかっていたんだ。あとは、旦那の死体を埋め込んだ薪をこっそりと忍ばせておいて、何食わぬ顔で死体の発掘を見守るってわけだ。これでQED」

野蒜少年の推理を聞いた神奈川県警はさっそく小谷雪子の自宅へ伺ったが時はすでに遅かった。老婆は部屋の中央で孤独死を遂げていた。遺書のたぐいは見つからなかったが、警察は夫を殺し自分も死ぬつもりだったと見て事件を片づけようとした。

野蒜少年は翌日解放された。岩槻刑事は「俺が特別に根回ししてやったんだ、感謝しろよ」と嫌味を言ったが彼は聞く耳を持っていなかった。すぐさま私物をまとめると、再び外の世界へ駆けだしていった。周囲は寒く、吐く息は白かったがどれもこれも自分の勝利を祝福してくれているように感じた。

ひとまず自宅へ帰ろうかどうしようか迷いつつ、繁華街の中を進んでいった。道端の液晶モニターから日々のニュースが流れている。その中に、銭湯の怪死事件に関するものもあった。まだ野蒜少年の推理はマスコミに伝えられていないらしい。

「続きましてニュースです。先日、行方不明とされていた神奈川県H山町在住の小谷平蔵氏が八甲田山の中腹で救助されました。彼は登山に行くと言って出かけ、数日の間行方不明となりましたが、運良く見つけた洞穴の中で体力を温存し、無事救助隊員に助けられたそうです。本人はいたって健康とのことですが、行方不明の知らせを聞いて妻は先日自殺を遂げてしまい、その知らせを聞くと悲しみに打ちひしがれていました」

このニュースに対して、コメンテーターは現代版ロミオとジュリエットですねとか、いやトリスタンとイゾルデですねとか、とかく適当なことを言っていたが野蒜少年はいっきに顔を青ざめるしかなかった。なんと、あの推理が間違っていたのである。

自宅に帰ろうとすると、すでに付近は警察が包囲していた。これは逃げるしかない。

とっさに野蒜少年は綿子からもらった制服を身にまとい、立派に女装してその場から逃げ去った。電車に乗って東京駅に向かい、ありったけの金を支払って東北新幹線はやて号に乗車。終点の八戸で特急つがるに乗り換え、途中の野辺地駅で下車。立派な鉄道防雪林を見ながらもう警察は追ってこないだろうと思ったが、できるだけ遠くへ行こうと思い、大湊線を下北駅で降り、下北交通バスで本州最北端の地である大間崎へ向かった。

大間病院近くの交流センターが宿を兼ねていた。さすがの警察でもここまでは追ってこないだろう。女風呂に行ったら貸し切り状態で、スリルは味わえなかったが久しぶりに落ち着くことができた。

風呂からあがり、浴衣に着替えて綿子からもらった制服を折り畳んでいると、突然サイレンの音が聞こえてきた。なにやら宿の外が騒がしい。

誰かに尾行されていたのだろうか。いや、そんなはずない。ローカル線として有名な大湊線は野蒜少年以外ほとんど乗客がいなかったし、下北交通のバスでさえ野蒜一人を乗せたまま前後に車の見えない道をひたすら走っていた。

まさか。

野蒜少年は綿子の制服をあさり、ベストの裏からGPS発信機を発見した。

はめられた。

しょせん、綿子は岩槻の娘だったのである。

こんなアイデアを無能刑事が思いつくはずがない。GPSを取り付けたのは間違いなく綿子本人である。

野蒜少年は綿子の制服を持って絶望していた。いずれこの部屋にも警察がやってくるだろう。綿子のスカートは赤と緑のマドラスチェック柄。この二色から連想されるイベント、それはクリスマスだ。

事件のあった晩はクリスマスイブだったのだ。野蒜少年はそれをすっかり忘れてのんびり銭湯に入っていた。綿子はきっと誘ってほしかったのだろう。

それどころか、一晩明けてクリスマスになったら野蒜少年は迷惑防止条例違反の容疑で逮捕されていたのである。とんだクリスマスプレゼントだ。呆れた綿子は演技をしつつ、野蒜少年を裏でハメてやろうと画策していたに違いない。今頃逮捕目前のニュースを聞いて嘲笑しているところだろう。

そして今回の事件。

白骨は小谷平蔵のものではなかった。だとすれば、一体誰なのだろうか。

時はクリスマスイブ。どこかの誰かさんが入る煙突を探しに町までやってきた。小谷雪子が言っていたように、この町はマンションや団地ばかりで昔ながらの家は残っていない。町に唯一あった煙突が初音湯のもので、その中に転落したとしたら。

こうして野蒜少年は事件を解決した。しかし警察にこんなこと言えるわけがないし、彼の宿泊する部屋の前にはすでに警察が完全に包囲していた。野蒜少年は再び綿子の制服を身にまとうと、完璧に女装し、一歩前に歩いて扉を開いた。

「ごめんなさい、お父さん」

END